

バーミンガム市交響楽団

意外!?日本初披露となるチョ・ソンジンのショパン協奏曲第2番!

インタビュー:高坂はる香(音楽ライター)



© Christoph Köstlin DG

チョ・ソンジン 「ショパンのピアノ協奏曲は2曲とも、演奏経験を重ねるにつれてますます緊張するようになる作品です。ある種のデリケートさを持つ作品で起きる心境ですが、それはネガティブなものではなく、もっと準備ができるのではという感情です。

オーケストレーションはベートーヴェンやブラームスのようなドイツの作曲家に比べれば弱いかもしれませんが、ピアニストにとってはやはり紛れもない名作です。一見シンプルそうだけれど、指揮者としてしっかり打ち合わせをしておかないとうまくいきません。おそらくショパン特有のルバートが原因だと思います。

難しいけれど特に好きなのは、第2番の第2楽章。バスーンとのデュオになるパートをはじめ、心に触れるものがあります。作曲上もおもしろいところが多く、メロディはまるで天から降ってきたかのよう。どうしたらあんな音楽を20歳で書けるのかと感じずにはられません。僕にとってはBBCプロムスでのデビューはじめ、数々の重要な場で演奏してきた作品でもあります。

和樹さんとは、日本ツアー直前のバーミンガム公演で初めて共演します。彼のことは信頼できる音楽仲間がみんな絶賛していて、以前からあなたも共演したらいいのと言われて続けていたくらいなので、ようやく実現して嬉しいです。さらにバーミンガム市交響楽団は、重すぎたり太すぎたりしない、とてもショパンに合う音を持つオーケストラ。絶対に素晴らしい組み合わせになると思います」



↑
インタビューの全文は
こちらから

常に新しい表現を追い求める山田和樹&バーミンガム市交響楽団(CBSO)の演奏に注目!

文:片桐卓也(音楽評論家)



© Benjamin Ealovega



© Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

1920年に創設されたイギリスの名門オーケストラであるCBSOは歴代の音楽監督に若い指揮者を抜擢し、一緒に成長するというスタイルで音楽作りをするという意欲的なオーケストラである。山田和樹は2023年4月にその首席指揮者、及びアーティストックアドバイザーに抜擢された。

「大きなきっかけは2016年にこのオケとの日本ツアーを成功させ、その後、首席客演指揮者に任命されたこと。昨年もイギリス最大の夏の音楽祭プロムスで共演し、オーケストラとの音楽的な繋がりが深まったことも大きなポイントでした」と山田は振り返る。

「僕はすでに40代なので、このオケの歴史からすると、首席指揮者になるにはちょっと年齢的に上だったのですが、前任者のミルガ・グラジニエ=ティエラが

子育てのためにどうしても時間が取れず、交替せざるを得ない状況のなか、カズキが居るから彼に任せれば良いじゃないかという流れになったようです」と今回の抜擢劇について語ってくれた。彼が考えるこのCBSOの特徴とは?の質問には、「サイモン・ラトルをはじめ、サカリ・オラモ、アンドリス・ネルソンス、そしてティエラという歴代の音楽監督たちの音楽作りのDNAをしっかりと持ち続けていて、世界で一番、演奏するのを楽しむオーケストラと言えるでしょう。常に新しい表現を求めて、楽譜に書かれたことだけでなく、指揮者のアイデアとオーケストラのアイデアの融合を試みる団体で、いつも共演が楽しみです」と山田は答えてくれた。

2023年の日本ツアーは、榎本大進(ヴァイオリン、ベルリン・フィル・コンサートマスター)とチョ・ソンジン(ピアノ、2015年ショパン国際コンクール優勝)という実力派ふたりをソリストに迎え、ラフマニノフの「交響曲第2番」とエルガーの「交響曲第1番」という大作交響曲を並べて、各地で披露する。

「エルガーはイギリスの国民的作曲家であり、日本で彼の交響曲を聴く機会は少ないと思いますが、ブルックナーに通じるスケールの大きさと精神的な深さを持った作品で、それをイギリスのオーケストラらしい深みのある音でお届けできることが嬉しいです。ラフマニノフの交響曲は昨年のプロムスでも取り上げた作品で、このオーケストラのサウンドにとっても良く合った作品だと感じています。

もちろん、ソリストのふたりは世界的なアーティストであり、特に榎本君とは何度も共演を重ねて来た間柄でもあるので、これまで以上に密度の濃いブラームスをお届けできると思います。チョ・ソンジンも素晴らしいピアニストで、彼の弾くショパンはやはり聴き逃さないでしょう」

6年ぶりとなる山田和樹とCBSOの日本ツアーは6月23日熊本から始まり、兵庫、石川、横浜、東京、愛知などを巡る。前回以上の期待に包まれながら、山田とオーケストラの新しいコンビネーションを楽しみたい。

S席 18,000円 A席 15,000円 B席 12,000円 C席 9,000円 D席 6,000円 (税込)

【問合/申込】 ジャパン・アーツぴあ 0570-00-1212 www.japanarts.co.jp

2023年6月29日(木) 19:00開演

ショパン:ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 Op.21 (チョ・ソンジン出演)

エルガー:交響曲 第1番 変イ長調 Op.55

6月30日(金) 19:00開演

ブラームス:ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77 (榎本大進出演)

ラフマニノフ:交響曲 第2番 ホ短調 Op.27

6月25日(日) 14:00開演

横浜みなとみらいホール

*曲目・出演者は6/30と同じ

主催:神奈川芸術協会

協力:横浜みなとみらいホール

神奈川芸術協会でも受付

045-453-5080

サントリーホール

主催:ジャパン・アーツ 特別協賛:ローム株式会社 後援:ブリティッシュ・カウンシル(全公演)

2023年4月27日、山田和樹がバーミンガム市交響楽団(CBSO)の首席指揮者兼 Artistic Advisor就任披露公演に臨みました。記念すべき公演に選ばれた楽曲は PanufnikのSinfonia Sacraとオルフの「カルミナ・ブラーナ」。輝きを放つ演奏による圧倒的な成功で、バーミンガム・シンフォニーホールの満場の客席は総立ちとなり、会場全体はお祭りモードの大盛り上がり。会場の様子を熱き現地レポートでお届け!



演奏のあと、楽員の名演を称えるマエストロ山田和樹

チューニングが終わり、山田和樹が舞台上に登場すると既に満員の客席から大きなブラーヴォの声が多数飛び交い、新首席指揮者を迎える「祝福&歓迎」ムードで会場中が満たされました。ユーモアを交えたショートスピーチで客席をさらに温め、オルフの「カルミナ・ブラーナ」を中心とするプログラムでは、オーケストラから豊かで明るい多彩な音色と、緊張感溢れる繊細なピアノシモ、そしてゴージャスでパワフルなエネルギーをオーケストラが大放出、児童合唱、学生合唱、そしてCBSO合唱団の総勢おそらく300名を超える大合唱団とともに「人間賛歌」を謳いあげて、客席は総立ち、圧倒的な大団円となりました。

ルーツの異なる指揮者とオーケストラが友好的でポジティブな環境下で創り出した、唯一無二の多彩なサウンドは、多くの移民を歴史的に受け入れてきたバーミンガムという街の持つ寛容性が産んだサウンドとも言えるかもしれません。

「ダイバーシティ」の重要性が叫ばれる現代社会および世界のクラシック音楽界において、山田和樹&CBSO

の新コンビが創り出すユニークで多彩なサウンドはこれから世界の注目の的となり、そしてその中心にいるのが、山田和樹である!と言うのが、なんとも誇らしい事実であり、そして何よりもこの6月にはこのコンビによる演奏を日本の皆さんに聴いていただけることがこの上ない喜びです。

5月3日には、ソリストにベルリン・フィル第一コンサートマスターの榎本大進を迎えて、6月の日本公演の演奏曲目であるブラームスのヴァイオリン協奏曲を共演しました。(翌5月4日にはノッティンガム・ロイヤル・シンフォニーホールでブルッフの協奏曲を共演)

榎本はこここのところ毎シーズンCBSOのソリストに迎えられており、その実力はオーケストラ全員が賞賛し、リハーサルでは皆が待ち構えていたかのように、榎本の登場に大歓声があがりました。

榎本と山田は友人としても音楽家としても互いに絶大な信頼関係で結ばれています。

山田と入念なりハーサルを経て迎えた本番での榎本は、波乗り名人が大波小波を巧みに操るが如く、常に新しく生まれるオーケストラとの化学反応に身を任せ、ライブ感満載のブラームスは、これまでどの演奏とも比較できない彼らだけの唯一無二のものとなりました。

日本ツアーでさらに共演を重ね、彼らの演奏がどう変化していくのか、今から楽しみでなりません。

後半はお馴染みリムスキー=コルサコフの「シェエラザード」。ステージに山田和樹が登場すると、楽団員から新首席を称える歓声があがり、それを受けて観客の拍手も高まる、まるで野球かサッカー観戦に立ち会っているようで、劇場全体の一体感はこのバーミンガム・シンフォニーホール特有のもの!

「シティ・オブ・バーミンガム・シンフォニー・オーケストラ」という名に称されるように、この街の人々はCBSOを我が家族のように愛していることがよくわかります。そんなオーケストラに迎えられた山田和樹は、飛び切りの幸せ色で「千夜一夜物語」を盛り上げに盛り上げました。

「バーミンガムはおもしろい! また来たい!」と思わせる雰囲気が街全体を包み込んでいました。



ソリスト榎本大進(ヴァイオリン)とともに